

ネオ・ゲシュタルティズム（高次モード知覚説）に託された希望—知覚の哲学の行く末を見すえて

染谷昌義 (Masayoshi Someya)

高千穂大学

『知覚と判断の境界線』は、以下の言葉で締めくくられている。

「知覚はわれわれが世界と接触する第一の手段であり、われわれが行うすべての心的活動の基礎にある。そうであるなら、知覚についての考察がさまざまな領域へ影響を与えうるといふ点に、何の不思議もないだろう。」(234頁。傍線は引用者による)

そのとおりだと思う。知覚の哲学、知覚を考察することには、希望がある。

ところが・・・である。わたしの読み方が間違っていなければ、源河氏の提起する「高次モード知覚説」は、知覚経験を「われわれが世界と接触する第一の手段」とは見なさない知覚説である！たぶん、この書のハイライトである美的性質の知覚を扱った6章の後半(3節、4節)、高次モード知覚説は錯誤説の一種に仲間入りをする。いわく、(現象的な)美的性質は、わたしたちが知覚できるものではあっても、世界の中に実在する対象の性質ではなく、知覚経験が有する特徴であると。美的性質の知覚可能性、そしてその知覚的判断の根拠は、美的性質が実在しないとしても、示すことができる、これが高次モード知覚説の(わたしにとっては)恐ろしい結論なのである。

甲本ヒロトの<カッコヨサ>は見ることができるし、この知覚を根拠にして「甲本ヒロトはカッケエ」という知覚的判断をすることもできる。しかし、甲本ヒロトは<カッコヨサ>を持っていないし、この性質を帰属するのは誤りであるし、正しくは「甲本ヒロトは、染谷にカッコイイの知覚経験を引き起こす傾向性を持っているものだ」と判断しなければならない。ただし誤りとはいえ、こうした知覚や判断は、染谷のこれまでの経験から培われた(?)趣味を行使したとき、染谷の知覚メカニズムが犯さざるをえない誤謬であって不合理ではない(p.233)。

美的性質の反実在論が主張される際、源河氏がとても気にしているのは、「解消不能な不一致」が生じる可能性である(cf.p.183)。染谷にとってカッケエと見られた甲本ヒロトは、娘にはダセエと見られる。同じ甲本ヒロトが、知覚者によって異なる美的性質を持つものとして知覚される。よくある状況だろう(そして、これは美的性質に限ったことではないとわたしは考えている)。この事態を説明するために、高次モード知覚説では、低次性質のゲシュタルト化の違いに訴える。染谷のゲシュタルト化と娘のゲシュタルト化が異なるために、不一致が生じるのである。「美的性質の知覚は知覚体制化という知覚作用によって説明されるべきものであり、対象がどのような性質をもっているかによって説明されるものではない」(p.188)。知覚の不一致は、知覚者の「それぞれの過去の経験や趣味が異なっており、そのため、同じ非美的性質が異なる仕方で体制化されたからだと説明できる」(p.196)。

しかしながら、同一の対象が、これまでの経歴により異なる趣味を形成してきた各人に相対的に、それぞれ一致せず異なる美的性質を持つことがあったとして、それがどうしていけないのだろうか。同一対象に異なる性質を見て取り帰属する、しかもそのどちらも誤りではない、そう考えてはまずいだろうか。

もっと言ってしまおう。モード(ゲシュタルト・体制化)は、知覚作用・知覚者の側の特徴ではなく、世界の側の、環境の側の特徴であると考え余地はないのか。世界の側に美的性質は実在しながらも、知覚者の側の経験と学習の多寡により、それを知覚的に発見できる人とできない人が出てきてしまう、そのようには考えられないのか。

生態学的アプローチの情報概念を導入すれば、体制化は、知覚者とは無関係に、環境の中で起こる環境の特徴であると考えることができる。知覚経験は実在との接触である。低次性質だけではない、高次性質もまた実在し、わたしたちはそれに知覚的に接触している。実在との接触を確保できる知覚説へと高次モード説を改良する余地はないのか。知覚の哲学の行く末を見すえて議論してみたい。